

前口上

教養と教育という名の、この二つの詞を並べてみますと、それが当然ながら一字違いの表現であることに、あらためて私たちは気付かざるをえません。そして、この「教養」にしても「教育」にしても、これらの語を成り立たせている、共通の要素である「教」の字に対して、私たちは臆気ながらも、みずからが幼少（子）の頃に通り、通わされました、あの学校（爻）の姿や、そこで振るわれていた教鞭（支）のイメージを、この「教」（=子+爻+支）という字の背後に、密かに透かし見ているのでは……ありますまいか。幸か不幸か、このようにして「おしえる」という人間の営みには、それが結果的に、どのような人と人との間（=人間）に生じるものであっても、どこかに強制的で威圧的な、要は、権力的な人間関係が前提とされ、そこで学習や指導という名の下に、何らかの模倣や訓練が行なわれなかったとすれば、どのような知識や技能の伝達も、不可能であるのは必定です。

考えてみますと、このようにして絶えず、私たちは誰かが誰かを教えたり、教えられたりする人間関係の、網の目の中に生きているのであり、しかも、その人間関係を突然、ある日、ある所で逆転し、交替する役目を引き受けざるをえない定めをも、私たちは担っています。そのような含みも言外に匂わせながら、本号では「教養×教育」という特集を組んでみましたが、このようにして「教養」と「教育」の間に差し挟まれております「×」は、それを否定や拒絶の意味で受け取って頂いても、はたまた乗算（=掛け算）の心算で考えて貰っても、まったく構いません。——と、このように申しあげました所、例年とは違い、いたって原稿の集まりが悪くなり、秋になっても冬になっても、ほとんど執筆者の皆様からの連絡が滞る羽目に陥りましたのは、やや深読みを致しますと、そこに皆様各様の、それぞれの逡巡が萌していたからなのではなからうか、と拝察している次第です。

本当は、このような時には歌舞伎役者張りの見得を切り、あの「便々だらりと待っているに、今日まで梨（なし）の礫（つぶて）もないワ」（『東山殿劇場段幕』）と決まり文句の一つをも口に出せれば……さぞかし爽快であったのですが、そのような芸当も叶わぬまま、ようやく締め切りを延ばしに延ばした末、今回の年報（第4号）の刊行に漕ぎ付けるに至りました。ともあれ、これで本誌も「三号雑誌」の汚名を着せられることは、なくなりましたし、今後も「教養の森」センターが和歌山大学の、まさしく「教養×教育」の拠点として、その使命を全うし続けるのであれば、この「教養×教育」という語が必然的に伴い、抱え込んでいる、さまざまな人間関係の困難や、その息苦しさから身を引き離すのではなく、むしろ、そのような事態に立ち向かい、抗いを繰り返すことからこそ、そもそも和歌山大学の「教養×教育」の未来は、将来するものであったに違いありません。